

近世における知行割と鬮取

松 本 寿 三 郎

はしがき

近世における地方知行の有り様については諸藩の実態に差異が見られるのであるが、肥後細川領においても地方知行の変質が指摘されて久しい。形式的には地方知行を追求してみると、知行宛行の御書出の交付のほか、知行所付目録・知行所高人畜帳・知行高田畑見図帳など一連の知行関係史料が残存するばかりでなく、村方においては給人とのつながりを物語る数々の史料に接するのである。こうしたところから推測するに地方知行の変質とは年貢直所務の廃止をさしており、それでも尚地方知行制は残されていたといえるのである。あらためて地方知行とは何なのかを再検討する必要があるように思われる。

本稿では地方知行制を村落の視点から検討するものである。

一、知行割をめぐる

寛永九年十二月肥後熊本に入国した細川忠利は父三斎への隠居領をはじめ、家臣への知行配分、蔵入れ地の確定のため、

近世における知行割と鬮取（松本）

近世における知行割と關取（松本）

早速領内の実態把握に乗り出し、先代の高物成、村人畜の差し出しを命じた。^① 細川氏は先代加藤氏から領域支配に關する資料を受け取っているに違いないが、農村支配の必要性から村庄屋に高物成、人畜を自主申告させようとしているのである。これに対して村庄屋は年貢高の隠蔽^②をはかり、報告を渋っていた。このなかで山鹿郡上内田村の一例だけ次の高物成一紙が残っている。

山鹿郡上内田村高物成一紙

一、本高千六百五石七斗七升六勺八才

一、高式百拾六石三斗七升三合式勺八才ハ先給人庄林隼人殿手竿ニて打出し分

二口合高千八百式拾式石壹斗四升三合八勺八才

内

百拾六石三斗壹升式合八勺八才

永荒川成

メ千七百五石八斗三升壹合

毛付分

内

田方千貳百三拾六石壹斗貳勺

畠方四百六拾九石七斗三升壹合

寛六御物成九百八拾六石壹斗六升壹合四才

寛七御物成九百八拾六石五斗三升六合

寛八御物成九百六拾四石四斗四升六勺四才

右之前少も無相違書上申候、以上

寛永十年

二月七日

庄屋平七判

星出 儀兵衛殿

坂本 喜介殿

これによると上内田村では寛永六年五七・八%、寛永七年五七・八%、寛永八年五六・五%、平均五七・三%の年貢率であった。

この村高は本高に先給人の打ち出し分を加えた高であり、郷帳高ではない。それから永荒川成をさし引いた高が課税の基準となっているのである。寛永十年五月にはほぼ全城の村高の確定がなされた見え、五月七日には奉行から右筆頭飯田才兵衛に宛てた「覚」にはつぎのような蔵納・給知の方針が示されている。

重而被申候や可申候間左右次第

覚 正中ニしまい候事

- ① 一御検地之儀者竿之広キ御郡迄被仰付、其外之御郡ハ其まゝ被召置可然奉存候事
- ② 一石もりの儀者ならしニ被候仰付候上ハ、今迄之石もりにて被為置可然奉存候事
- ③ 一クシをたて様子可承事
- ④ 一御内検ニ手間入可申候間、土免ニ請申御郡ハ一郡成共土免ニ被仰付、請不申御郡迄を秋免ニ被仰付可然奉存候事
- ⑤ 一御内検之儀者早田出来次第ニ御奉行を被差出、九月廿日切ニ仕廻申候様ニ被仰付可然奉存候事
- ⑥ 一御蔵納ハ熊本より宍里半・武里之間海道筋宿々・山奥・浦々水夫付・御国境并ニ上々之所・下々之所・さこ々々多キ所定御蔵納ニ被成、永々御給人知ニ御配不被成様ニ被仰付可然奉存候事
- ⑦ 一小物成之儀者、御給人知ニ御座候とも物成之外ニ被成御蔵納へ被召上可然奉存候事
- ⑧ 一御知行割之儀者、当年之御内検相済之前かと三年入物成と引合四年ならしニ而御わり被成可然奉存候へ共、左様ニ

近世における知行割と圈取（松本）

近世における知行割と關取（松本）

御座候ハ、御知行わりつかへ御所務ニも指合可申候間、先前かとの三年ならしにて御わり被成、扨当秋之御内検之上ニ而指引被仰付可然奉存候事

⑨一同被為割様之儀者、扨万石組何拾人、貳万石組何十人と大わりニ被成、其組相之者共として相對仕可成ほと村切ニ片付割符仕候様ニ被仰付可然奉存候事

⑩一小身成ものほと熊本近キ所ニ而被遣、大身成者ほと次第ニ遠キ所にて被遣、扨大身成ものニハざこくまで有之所をも高ニ応し加へ被遣候而可然奉存候、又馬之かい料之為ニ熊本ちかき所ニ而も御知行少宛ハ御割符被成被遣候てハ如何可有御座哉之事

以上

本稿の目的とする知行割に關する条項は後半の⑥⑦⑩項である。この方針にしたがつて知行割が開始され、五月に父忠興の隠居領、七月に弟立允・天ら一門の知行割を成した後、家臣については七月十二日家老長岡佐渡守へ合志郡・玉名郡を宛行つた。また御こは・自徳院への知行宛行は七月十四日になされている。七月十二日付けで御國之惣奉行にあてて知行割について「小國豊後境にて貳百石ノ割一ツ、玉名か菊池か鮑田か合志かにて貳百十貳石の割一ツ、また貳百三拾五石ノ割一ツ、貳百貳拾石之わり一ツ、鮑田郡にて三百石の割一ツ 阿蘇之神主之知行之そはにて貳百石之ワリ一ツ以上、此分割候て可越候」の提出を命じている。御國之惣奉行が中心になって知行高の割（知行高の單位）が作られ、藩主の意向に沿つて知行の配知がなされたものと思われる。ところで七月に宛行われた長岡佐渡守・御こは・自徳院の場合いづれも知行所付目録であり、この段階で四ツ物成の撫高をとっている。家老長岡佐渡守以外の家臣への知行宛行は九月朔日になされた。佐渡守への知行地は玉名郡・合志郡に集中しており、かつて豊前において行つた知行配分的方式をとっているが、このほかの家臣にも同時に所付目録が与えられたかは明らかでない、このときの忠利のお書出は藩士三四家に伝来しているが、所付目録は一通も残っていないからである。このときの知行割にもっとも近いものとして寛永十二年の

御印物をあげることができる。

これらは寛永十二年に新知もしくは加増の者である。中根半丞・志水久馬・住江求馬はいずれも寛永十一年江戸で登用されたもので、「寛拾壹物成より遣候、右物成之内銀子貳貫目江戸ニ而渡候、残ル物成積候而肥後ニ可渡候」との書き入れがある。明石玄古・永良長兵衛・里村省庵の三人は益城郡北田尻村・宇土郡松山村で全く同一の高を配知しており、平野六蔵と長野八兵衛も菊池郡木山村で同一高を配知されている。知行高がそれほど高くないにもかかわらず知行地が数ヶ村にわたる場合が少なくないこと、村内での知行高に均等性が見られることを指摘できる。いわゆる散在知行制と均質性が知行配分の原則となっている様子を窺い知るのである。(第1表)

こうした知行地の散在性と均等性は撫高である知行高ばかりでなく、百姓の持ち高である現高の均等ともなっている。一例として寛永十四年の地撫検地帳によって山本郡諸村の知行地をあげれば第2表の如くである。

山本郡の諸村は大方の村で撫高が現高を上回っているが、逆の村もある。地撫検地は百姓の不公平観をうまく利用して百姓高の確定を計った。加藤氏時代に決定された現高は三十年余を経過して生産高と乖離を生じており、地撫検地は村高は前代の高を継承しながら、庄屋以下名子百姓にいたる村人の立会いのもとで生産力の実態に即して百姓高を再配分したものであった。村人の納得の上で高を割り付けたのである。この百姓高に前述の寛永六、七、

近世における知行割と圈取(松本)

第1表 寛永12年の知行割(部分御旧記)

寛永12,	津 田 山三郎 200石	益城郡志々水村 井寺村	200石
12,12,朔	明 石 玄 古 300石	益城郡北田尻村 宇土郡 松山村	223,85358 76,14642
12,12,朔	永 良 帳兵衛 300石	益城郡北田尻村 宇土郡 松山村	223,85358 76,14642
12,12,朔	里 村 省 庵 300石	益城郡北田尻村 宇土郡 松山村	223,85358 76,14642
12,12,朔	長 野 八兵衛 300石	菊池郡 木山村	169,01415
12,12,朔	平 野 六 蔵 300石	菊池郡 木山村	169,01410

第2表 山本郡における知行地（寛永10年代地撫帳）

寛永14,12,12 慈恩寺村	撫高 329,4975	現高 245,238
郡 与茂丞	100,76893	75,4578
永良 彦大夫	75,5762	56,59338
久野 二郎吉	75,5762	56,59338
小川安左衛門	75,5762	56,59338
寛永14,12,12 伊知坊村	604,22783	448,30978
吉田 縫殿助	223,67425	166,20221
吉田 平兵衛	223,67425	166,20221
落合 勘兵衛	134,20512	99,72186
沢地吉右衛門	22,67423	16,18349
寛永14,12,12 仁王堂村	613,27398	495,075
金子九左衛門	102,21233	82,5125
西郡長左衛門	102,21233	82,5125
臼杵 勝大夫	102,21233	82,5125
吉田 長助	102,21233	82,5125
荒木 長助	102,21233	82,5125
入江 八助	102,21233	82,5125
寛永14,12,12 舟島村	328,1494	318,494
郡 与茂丞	99,878	98,00369
永良 彦大夫	74,4238	72,52817
小川安左衛門	74,4238	73,4984
久野 次郎吉	74,4238	73,0289
寛永14 大清水村	746,05982	902,5645
吉田 縫殿助	276,31767	334,2822
吉田 平兵衛	276,31585	327,789
落合 勘兵衛	165,79397	200,5734
沢地吉右衛門	27,4238	33,4289
寛永14,12,12 平原村		
貫 角左衛門	113,72147	94,268
瀬崎猪右衛門	113,72147	94,268
寛永15,11,21 一木村		
竹内七郎右衛門	78,576	107,2015
田中 左兵衛門	78,576	107,2015
寛永15,11,21 上古閑村	200,7053	201,695
国友平左衛門		100,8475
竹内亀右衛門	100,35268	100,8475

近世における知行割と圈取（松本）

注 空白の部分は記載を欠くもの。

八年度の物成高を反映させたものが撫高であり、これには百姓を納得させる公平さがあつたに違いない。

山本郡諸村の知行地には一村全給の場合もあるが、大方の村は数人に分割して支給されている。相給と呼ばれる分割知行では、給人によって村内の知行高に差異がみられるが、慈恩寺村、伊知坊村、仁王堂村、船島村、平原村、上古閑村・一木村では数人の撫高・現高ともに全く均等に分割している。永良彦大夫（一五〇石）・小川安左衛門（一五〇石）・久野次郎吉の三人は慈恩寺・船島両村で均等に知行を拝領している。仁王堂村で一〇二石余を拝領した金子九左衛門以下も一五〇石取りであとの四七石七斗は飽田郡上立田村にあつた。第1表にあげた明石玄古・永良長兵衛・里村省庵・長野八兵衛・平野六蔵の知行割が例外ではなかつたことを示している。散在知行には給知を分散することによって地域による凶作のダメージを回避し、給人にある程度の年貢収入を保証する意味合いもあつたかと思われるが、村内の知行地の均等に配分することによって給人間の年貢収入を平均化するものであつた。

二、知行の圖取

知行割の手順としては、諸郡々へ配知になることについて支障ないとの差し出しとともに上知限りに人畜帳とともに添え差し出す事になっていた。しかる後に知行割目録・所付目録の交付つづいて高人畜帳・高田畠畝数帳作成にと進んでいくのであるが、目録交付の段階で圖取りという過程がある。元禄五年田辺孫右衛門の知行割について次の記事がある。

九月十一日^①

一田辺孫右衛門御知行割目録下割ともニ四通今日出

但孫右衛門知行割より四つ成渡り、是より初ル

圖取埒明所付目録相済

知行割における圖取りとはいかなるものであろうか、享保十八年六月二五日には十六年十二月以来の新知・御加増の者

近世における知行割と圖取（松本）

近世における知行割と闢取（松本）

へ十九名への知行割が行われたが、その過程は次の様なものであった。

丑八月二十五日^⑧

一享保十六年十二月以来之新知・御加増之衆御知行割当夏よりしらへ懸り御知行下割当六月二十七日於御花畠闢入夫々地方相極候ニ付、所付相認今日御奉行所へ差出申候覚書名付共ニ左之通り

このときの要領は「六ヶ年撫ニ而御知行下割仕候を、如例当月二十七日御花畠之寄ニ闢入」したのであったが、すべてが闢入れて決定されるのではなく、森井惣九郎への五百石の下割は古新地の内から配知されたものであったので闢も入れず知行割がなされたという。

知行の闢入れ（闢取）は本身や一門の場合も例外でなく延享三年（一七四六）長岡少進の知行割に際して前例を調査したところ次のような結果が報告された。

覚^⑨

- 一清水縫殿殿江御知行四千石被為拝領元禄三年地方相渡申候節、闢ニ而相極申候
- 一長岡友山老江御知行千石被為拝領、右同年地方相渡り申候節、闢ニ而極申候
- 一長岡半左衛門殿江御知行千石被為拝領、元禄十三年地方相渡り申候節、闢ニ而極申候
- 一山名十左衛門殿江御知行千石御加増被為拝領、右同年地方相渡り申節、闢ニ而極申候
- 一長岡監物殿御加増之五千石、宝永四年地方相渡り申候、此節之御知行割帳色々吟味仕候へ共、何方江片付居申候哉急ニ見兼申候

一有吉大膳殿江御知行八百石被為拝領候を、享保十八年地片相渡り申候節、闢ニ而極候と相見候

四月

御郡方

右之書付四月十七日上村理右衛門殿へ相達被申候事

この前例にしたがって長岡少進の知行割は圖によって行うことが決定し、二千石の知行下割が二通作られ、五月五日圖入れが行われた。

覚

一貳千石割 貳ッ

内

芎割 長岡少進殿渡り

芎割 御蔵納戻り

以上

五月

右之通五月五日於御花畑圖ニ而相極り、御知行所付目録致出来候事

圖入れとは配知する知行高に相当する複数の知行の割を作成しておき、その中から一つを選ばせるやり方である。長岡少進の場合二千石の割を二つ作っておき、その片方を長岡少進がえらんだので、残りの二千石の割一つは御蔵納にもどしたというのである。同年七月に小笠原多宮ら一〇名に新知・加増の配知があったが、その時の知行割は圖の入れ方をよく示しているので煩を厭わずあげてみよう。

覚²

一五百石割 貳ッ

内

芎割 小笠原 多宮

芎割 御蔵納戻

近世における知行割と圖取（松本）

近世における知行割と鬨取（松本）

一貳百石割 貳ッ

内

沓割 長谷川仁左衛門

沓割 御蔵納辰

一三百石割 貳ッ

内

沓割 竹原 清大夫

沓割 鳥井 彦大夫

一百石割 四ッ

内

沓割 永嶺 嘉平次

沓割 杉 形右衛門

沓割 真藤 又之允

沓割 船瀬 次郎七

一五拾石割 貳ッ

内

沓割 井上儀右衛門

沓割 御蔵納辰

一三拾石割 貳ッ

内

沓割

樋口 元賀

沓割

御蔵納辰

以上

七月

五百石から三十石迄配知の高に依じて複数の知行割を設定しておき、それぞれが圈を入れて自らの知行地を引き当てるのである。知行割はあらかじめ準備されているとはいえ、これを引き当てるのは自分であり、もし不良の知行地を引き当てたとしてもその責めは自らのくじ運に帰することである。

これら知行割は御郡方で下割を作成、清算した上で中折紙に中書して、花畑御奉行所へ持参、家老中列座の上で圈入れが行われる。その後決定した給人の氏名表と圈目録を添え、中書の圈を文箱にいれて御郡方へ届ける。御郡方では大杉原堅紙に所付目録を清書して、人数分作成、郡奉行の印判を揃えた上で、上包みにそれぞれ「何某殿 御奉行所」と記して、奉行所担当根取に届けた。在国の給人には直ちに手元に届けられるが、江戸定詰の給人の場合には郡奉行の印形を取り揃えた上で飛脚便で江戸に届けた。こうして給人の手元に届けられた知行所付目録を蟹江家文書にみると次のようなものがある。

「堀江長兵衛殿

奉行所」

堀江長兵衛被為拝領御知行所附目録

現高六拾三石四升七合七勺六才

菊池郡之内

一高五拾七石三斗九升九合七勺三才

今村

近世における知行割と圈取（松本）

近世における知行割と園取（松本）

一木孫三郎上知

現高貳拾八石壹斗四升九合九勺六才

鮑田郡之内

一高四拾貳石六斗貳勺七才

上代村

本方

現高九拾壹石壹斗九升七合七勺貳才

高合百石

右田畠人畜無相違化被引渡所、如件

宝永二年五月十一日

堀内喜左衛門 ㊦（花押）

横井佐左衛門 ㊦（花押）

吉田善右衛門 ㊦（花押）

菊池

塚本弥次兵衛殿 ㊦

鮑田

福田 左助殿 ㊦

甲野左次右衛門殿 ㊦

こうした所付目録は新知・加増・減知のさいして知行地の引き渡しを確認するものであったから、村別の知行高人畜と知行高田畑畝数帳をセットにして引き渡された。蟬江長兵衛の場合

宝永貳年七月 鮑田郡上代村蟬江長兵衛殿御知行高人畜御帳

宝永貳年七月 菊池郡今村蟬江長兵衛殿御知行高人畜帳

宝永貳年七月 鮑田郡上代村蟬江長兵衛殿御知行高田畑畝數御帳

宝永貳年七月 菊池郡今村蟬江長兵衛殿御知行高田畑畝數御帳

が手元に届けられた。上代村の安右衛門九人 現高貳拾八石余（田畠壹町八反貳畝二七歩）と今村文之允以下六匳はか三十五人・現高六拾三石余（田畠八町貳反三畝）が知行地として確定したものであった（第3表）。知行地は上代村では一匳分であり、今村では六匳分とはかに越高として孫右衛門の高四升五合余で高の微調整をしているのである。知行地支配が生産力としての一筆々々の田畑ではなく、年貢を負担することが可能な経営体であることに留意しなければならない。確実に収入が保証されなければ、給人の生活は維持できないのであるから知行割は慎重に行われた。寛文九年十月十五日の竊帳に

新知・御加増被下候衆知行割仕、唯今相渡申儀成不申候、当年は所々損毛にて御座候故、知行わり仕申候而も大分損を仕候者も可有御座候、永川成・当荒も御座候故わり申儀成不申由申上候得は、当年は御蔵米にて相渡、来春知行割仕可然思召候、

とあり、不作の年には知行割をせずとりあえず歳米を支給して給人の収入を確保し、翌春に知行割を行うこととしたが、この例は不作時の前例として参考にされた。元禄三年二月にも新知・加増・替地が合わせて六千八百三十石のぼり、知行割が要請されたが、前年の年貢のうち春請け・夏請けなど未進が例年になく多く、このまま給知になった場合未進取り立てに困窮するので、三月の中算用が済んだあとで知行割をしてはどうかとの意見が出されている。

近世における知行割と匳取（松本）

第3表 菊池郡今村蟬江長兵衛の給知百姓

百 姓	持 高	人数	牛馬	家
文之允	8石85616	7	馬 2	5軒
六右衛門	7, 59117	7		3
長右衛門	11, 59111	5	馬 1	4
右衛門	7, 32437	7	馬 2	5
猪 介	9, 72828	8	牛 1 馬 1	5
清九郎	17, 91101	1	牛 1	2
越高				
孫右衛門	0, 04536			

近世における知行割と圖取（松本）

三、給知村の高組分けについて

村方においては相給に備えて高人馬を組分けする例がみられる。寛永十四年に行われた山鹿郡上永野村人番改帳^②では村内を六拾六石二斗三升二合三勺九才の七組（一組は前欠のため不明ながら村の現高五百八石余から同高と推定）と四拾四石五斗五升二合五勺七才の組計八組に分けられている。七組は高を等しくするばかりでなく、田高・畑高・新地・永川成まですべて等しくしていた。わずかに百姓数・竈数・男女数・牛馬数に差異が見られるに過ぎない。この組分けは庄屋・惣百姓残らず立会い吟味の「上甲乙なきように七組余に人馬を割りつけたもので、「右七与之内より相給人知罷成候時、人馬ニ付甲乙之出入少も申上間敷候、自然様子之出入申上者於有之ハ、此おく書を以、御沙汰可被成」後日のため与頭が連判したものであった。（第4表）

上永野村と同じく山鹿郡上内田村でも高割がみられる。この村は寛永十二年には蔵納地千八百貳拾八石余^③であったが、この村は慶安元年には現高千八百六拾貳石余^④となっているが、上永野村と同じく均等の高三組、現高貳百六拾九石余の割二つ、現高八拾八石余の割一〇、現高三石余の割三つ計一五の知行割を作成し、知行配分をおこなった。それが山鹿郡上内田村御知行田畠高畝数地撫帳である。（第5表）

上内田村の三百九拾七石余の割二つ、百貳拾三石余の割八つ、三石余の割三つは、撫高・現高・田畠高・田畠面積・万引高のすべてにおいて均等に分割されている。まさに相給人知になる時、人馬に甲乙の出入りが少しもない状態であるといえる。中で

第4表 山鹿郡上永野村における組割（寛永14,8,3）

	一与分	田高	畠高	新地	永川成	与頭	竈
①						(七兵衛)	3
②	66石23239	42石06611	21石32352	0石76108	2石08168	久三郎	8
③	66, 23239	42, 06611	21, 32351	0, 76108	2, 08168	甚太郎	6
④	66, 23239	42, 06611	21, 32352	0, 76108	2, 08168	七左衛門	7
⑤	66, 23239	42, 06611	21, 32352	0, 76108	2, 08168	九郎右衛門	7
⑥	66, 23239	42, 06611	21, 32352	0, 76108	2, 08168	犬丸	7
⑦	66, 23239	42, 06611	21, 32352	0, 76108	2, 08168	三郎兵衛	8
⑧	44, 55257	28, 30223	14, 34216	0, 51214	1, 39604	伝右衛門	5

も百貳拾三石余の一〇名は知行高三百石である。上内田村の配知高百参拾貳石余の佐瀬弥内と百貳拾九石余の平野助拾郎の二人も現高は他の八人と同じく八拾八石余であり、万引高・田方・島方ともに全く均等である。残り八人の給知は撫免帳では角田団四郎を上内田村貳百拾三石余とするほかは、山鹿郡上内田村に百貳拾三石余、玉名郡（村名不明）に百七拾六石余としている。佐瀬、平野の撫高の相違が何に由来するかあきらかでないが、角田の場合は転写ミスと思われる、これらを勘案すれば八人の知行配分は第1表に述べた明石玄古らの配知と同じ二郡の同じ村における均等相給知行配分だといえる。三人の地侍の上知分も同様に均等である。ここでは明石玄古らの知行割には現れなかった知行地ごとの田・島・万引高の均等な配分が示されており、このためには上永野村に見るような人畜の均等割の成立が不可欠の要素となるであろう。当時かなりの範囲で相給知行がなされていたことは否定できないが、その中で均等相給知行がどの程度行われたかは全く議論されていない。然し均等であるか否かは別にして、相給がなされるためには村内の（高分け）組分けがなされなければならず、上内田村にみる高割は相給村の知行高による高分

近世における知行割と關取（松本）

第5表 山鹿郡上内田村給人別田・島・高畝数（慶安元、10、16）

撫高	現高	田	島	万引高	給人名	庄屋
475, 74685	431, 76870	2000畝06	982畝24	27, 46663	陣野佐左衛門	平兵衛
397, 92878	269, 29954	940, 12	1061, 06	17, 11168	野田 安兵衛	長左衛門
397, 92888	269, 29954	940, 09	1061, 09	17, 11168	益田弥一右衛門	市右衛門
123, 63418	88, 24043	415, 15	194, 06	5, 53866	磯野 治兵衛	源左衛門
123, 63418	88, 24043	403, 06	200, 09	5, 53866	都甲 太兵衛	藤右衛門
123, 63418	88, 24043	418, 15	203, 21	5, 53866	落合 勘兵衛	新兵衛
132, 36065	88, 24043	407, 09	205, 15	5, 53866	佐瀬 弥内	太郎右衛門
123, 63418	88, 24043	414, 12	190, 15	5, 53866	角田 団四郎	七郎左衛門
123, 63418	88, 24043	403, 15	201, 24	5, 53866	松島 三宅老	七藏
123, 63418	88, 24043	420, 24	233, 27	5, 53866	吉田加左衛門	伊右衛門
123, 63418	88, 24043	404, 24	229, 00	5, 53866	小島 権兵衛	勘介
129, 00097	88, 24043	397, 15	204, 27	5, 53866	平野 助拾郎	太郎兵衛
123, 63418	88, 24043	392, 21	249, 00	5, 53866	酒巻弥五右衛門	七郎兵衛
5, 00000	3, 30220	20, 10	14, 21	, 21033	田久保利右衛門上知分	
5, 00000	3, 30220	20, 10	14, 21	, 21033	木庭 五郎兵衛上知分	
5, 00000	3, 30220	20, 10	14, 21	, 21033	高田助左衛門上知分	

近世における知行割と園取（松本）

けの一例といえる。

いまこの上内田村の知行割にみた均等割された高人畜群、あるいは上永野村の均等高に分けられた組割が成立するためにはもう一段階の作業が必要であった。これらにはかまど数からみて最小の単位ではない。もっと小さな単位、おそらく農業共同作業の単位であり、あるいは相互扶助の単位でもあり、これ以上に分割できない単位として五人組があった。五人組はしばしば連帯責任、相互規制・相互監督の意味でマイナスの面が強調されるが、当時の農作業は個別的な家族労働力だけで維持することは困難であり、農村生活において生産から納税にいたる営農活動では五人組の存在は無視できないものがある。ここで五人組の機能を論ずるものではないが、村落における最小の単位として機能していることを確認しておきたい。

前述の宝永二年菊池郡今村は坂新平（新知二百石の内七十石九斗余）・猿木角右衛門（新知三百石の内三十四石五斗余）・蟬江長兵衛（新知百石の内五十七石三斗与）の三人に割付られた。このとき蟬江長兵衛の配知は現高六十三石余（撫高五十七石余）・男女三十五人・牛馬八疋・家大小二十四軒であったが、これは実は一組ではなかった。「蟬江長兵衛殿分 菊池郡今村御知行割高組目録」および「蟬江長兵衛殿分御知行割ニ付高組目録」によれば、第3表に示した給知百石は現高二十八石余（文之丞・兵右衛門・長兵衛・越高分）と現高三十四石九斗余（庄右衛門・猪助・清九郎の三かまど）の二組であつた。彼らはそれぞれの組分けについて次のように述べている。

右は菊池郡今村今度御給知ニ被仰付、蟬江長兵衛殿・猿木角右衛門殿・坂新平殿御渡し被成、園取ニ被仰付候ニ付、右之通私共立会高田畠人畜等ニ至迄、少茂無甲乙割合せ目録調差上申候、以上

宝永貳年六月

今村庄屋

文右衛門 印

同村頭百姓

甚兵衛 印

同

平右衛門 印

塚本弥次兵衛殿

この高組目録は村方から作成されて郡奉行に提出されたものである。村方では蟬江・猿木・坂三人の配知高に合わせて幾組かの高組を作成して提出したものである。五十四石余の蟬江氏が二組であるから、七十石余の坂氏も二組以上を配知されたであろう。こうして知行の割が郡奉行に提出された。蟬江長兵衛の例でみると、彼はこの村から提出された文之丞の高組と庄右衛門の高組を組み合わせた現高六十三石余を知行高五拾七石余として配知されているのである。村方から提出された高組が如何に組み合されているかを村人は知らないし、その組み合された割（知行割高）は圖によって決定されるのであるから、圖取りが済むまで給人と知行地は何の関わりもない。給人は全く知らない土地・人畜を支配せざるを得ないのである。

したがって事情のよくわかった「高・人畜」が知行所として配知されるならば、給人にとって好都合である。細川領において上知が多く見られるようになる宝暦期以後になると、加増の時に望んで上知を拝領することも多くなる。この場合圖入れは行われない。文化八年閏二月宮本伝右衛門が五十石加増された時にこのことが問題となった。

御内意之覚^⑨

町 孫平太

白石 清兵衛

小山 門喜

宮本伝右衛門儀御知行五十石御加増被下置候ニ付、御知行所附目録取しらべ申儀ニ御座候、然処伝右衛門家督之節被

近世における知行割と圖取（松本）

近世における知行割と鬭取（松本）

減候御知行五十石池田手永孫代村ニ今以上知相成居申候、此節先知之五十石御引渡被下候ハハ別而難有仕合可奉存候、右体御知行目録御極之儀は鬭入被仰付事御座候、左候ては鬭ニ当り可申哉も難斗儀ニ御座候、依之御見合可有御座奉存候得共、いつれニも御引渡被仰付五十石之儀御座候間、別段之御仕法を以先知五十石、右孫代村ニて御引渡被仰付候様有御座度御内意相達申候、此段宜ク被成御参段可被下候、已上

閏二月

内意之通上知ニ相成居候池田手永孫代村無鬭入引渡之儀可有其取計候、已上

三月朔日

このとき候補地として池田手永孫代村、内田手永、社家村、甲佐手永津志田村の三ヶ所があげられており、比較のためつぎのデータが提供された。

(1) 現高四拾七石六斗貳合六勺九才

池田手永

一高五拾石

孫代村

宮本甚蔵上知

但割替無ニして先上知之儘直ニ被渡下ニして本行之通

(2) 現高四拾八石八斗貳合四勺四才

内田手永

一高五拾石

社家村

中村市郎右衛門

五里半余

上知高之内

男女四拾三人

馬拾壹疋

(3)現高四拾六石七斗八升貳合貳勺三才

一高五拾石

甲佐手永

四里半余

津志田村

男女貳拾人

馬貳疋

但此節割替を以被渡下候ハ、此釣二稜之内關当り之村ニ而相渡り申候事

付紙

人数并馬数帳面前より割合相しらへ申候處、本行之通御座候、於村方は關入を以引分候ニ附増減可仕候事

ここでは配知の五拾石は先知の孫代村と割替の二村が準備され、割替の二村はそれぞれに城下町からの距離・人数・馬数が書き上げられて、關によって決定されることになっていた。この件に關して機密間が御郡間に先例を問ひ合わせたのに対して、御郡方奉行は「此儀當時迄見合無御座候、尤先知被返下旨被仰渡候面々之内ニ茂、先知は余人江相渡り候へハ、割替を以外々上知より所付目録相渡り候儀間々見合御座候間、御加増被仰付先知余人江渡りニ相成不申候得は、依願は先知を被渡下ニ而も可有御座哉、左候得は少々増減仕可申、然る時は全先知被渡下御振り合ひニ当り不申候、右之通被仰付候へは御知行割關入無ニ而相済申候事」と答えている。このやり取りの結果が宮本伝右衛門への無關引渡しとなつたのを見ると、当時の一般的な知行割は關入れであつたといふことができる。結果は宮本伝右衛門の希望が入れられて先知の孫代村が給せられたのである。

ここでもう一つ注目すべきは付紙に記された村方の対応である。ここに書き上げられた人数・馬数は村方において關入

近世における知行割と關取（松本）

近世における知行割と圈取（松本）

によって引き分けられたといっている。圈入れは給人の知行地決定ばかりでなく、村方における百姓の所属の決定にも用いられる方法であった。

圈による配分は干拓地の地方割直^①においても用いられており、土地配分の方法として馴染深い方法であったように思われる。

すでに提示した史料でも明らかのように、細川領においては幕末まで知行割がなされ、田畑・人畜の引渡しがなされていた。正徳三年（一七一三）年貢直所務から歳米支給になっても知行割は行われている。その概要は第6表に見ることができる。

結び

近世における地方知行の研究史においては主として領主論的視野から地方知行の変質が論ぜられてきた。地方知行から歳米知行へと移行する近世的知行関係は、細川領でも年貢直所務から歳米支給というプロセスで説明されてきた。しかし細川領の知行宛行は単に知行高を示すばかりでなく、土地と人畜を配知することに並々ならぬ努力が払われており、給人間の年貢収入の均等性を保つために知行割に圈入れの制度が採用されたし、一方では知行地の百姓（給地百姓）の構成にも圈入れが一般化していることは、知行地の不公平・不平等、負担の平等制を回避しようとするところから出ている。給人に対しては収入を保証した。近世の人々は感覚的に圈入れにうけいれ、圈入れに客観的な平等性を感じていたのではあるまいか。

細川領における圈の初見は最初に示した寛永十年五月の「覚」第三条の「クシをたて様子可承事」であろう。この対象が知行割なのか、検地・石盛なのか明確にしがたいが、既にこの段階で「くじり」が地方支配のキーワードになっているのである。さかのぼって豊後時代の知行割に注目してみると、細川忠利の代かわりの知行割替目録に「鑑を入れ」という意

第6表 正徳3年以後の知行・高人畜帳

近世における知行割と圈取（松本）

正徳5, 8,	谷小源太玉名郡御知行所中根村高人畜帳
享保2, 7,	上妻新右衛門被為拜領御知行所附目錄
3, 2, 18	松野八郎左衛門佐敷江就被害直代知所附目錄
12, 正, 28	弓削新太郎知行引渡差紙
18, 6, 27	有吉大膳被為拜領御知行所附目錄
19, 9, 15	志水主水被為拜領御知行所附目錄
元文2, 閏11, 12	三宅藤右衛門知行
3, 5, 23	池永一平被為拜領御知行所付目錄
延享3, 9, 朔	名越周徹被為拜領御知行所附目錄
4, 12, 5	有吉大門老知行所
宝暦5, 9, 25	志水伯著御知行引渡差紙
6, 11	八木田園七知行所岩野村田島名寄
8, 11	郡織九郎知行拜領
8, 10, 15	首藤十次郎被為拜領御知行所附目錄
8, 12, 22	山田五郎右衛門上知
9, 10	山本文右衛門知行上目録
10, 4, 16	河喜多角左衛門上知目錄
11, 4, 27	弓削一角被為拜領御知行所附目錄
12, 3	道家左八郎給知
11, 11	尾藤又左衛門知行坪附
12, 5,	沢村二九之助上知目錄
12, 9, 23	安藤久兵衛上知目錄
12, 9	兼松七右衛門知行高上知目錄
12, 10, 13	隈部庄兵衛上知目錄
13, 4, 27	堀部百次郎被為拜領御知行所附目錄
13, 12	上益城睦手永下六嘉村堀部百次郎殿御知行高人畜御帳
14, 2	山本郡西山村堀部百次郎殿御知行高人畜帳
明和2, 正	平野嘉右衛門上知知行所附
2, 正	額田權次上知目錄
5, 3, 25	乃美兵大夫日為拜領御知行所附目錄
6, 2, 朔	弓削一角知行目錄
6, 2, 朔	乃美兵大夫知行目錄
安永元, 10, 22	小堀詮順御知行引渡目錄
2,	高橋奎大夫上知
6, 10, 21	仁田市郎左衛門知行所附目錄
7, 4, 25	山崎惣兵衛御知行所附目錄
天明元, 9, 25	中垣久次知行所附目錄
4, 閏正, 15	吉田善九郎御知行所附目錄

天明 6, 9, 朔	阿部多膳知行目録
6, 12, 25	弓削平八御知行所附目録
寛政元, 9, 10	山崎角弥御知行所附目録
2, 12, 9	米田勘十郎御知行所附目録
5, 10, 11	志水次兵衛病死ニ付御知行上目録
8, 4, 21	堀部義之助御知行目録
8, 9, 27	横山幸記へ御知行引渡差紙
文化 8, 2	上益城甲佐手永八丁村大村久兵衛殿御知行高人数小前帳
8, 閏2,	宮本伝右衛門加増御知行所附目録
8, 5, 19	宮本伝右衛門御加増知所附目録
10, 12, 27	宮本伝右衛門御加増知所附目録
13, 閏8, 28	渡辺栄喜御知行所附目録
15, 5, 23	中村庄右衛門御知行所附目録
文政 5, 7	八代郡野津手永下村永良仙五殿御知行高人数改御帳
7, 12, 18	井上新之允御加増知所附目録
8, 8, 14	山崎五郎右衛門御知行所附目録
9, 8, 28	鹿子木畳平御知行所附目録
9, 9	上益城木倉手永横野村武藤勝平殿御給知田畑畝高人数しらへ帳
9, 9	宇土郡松山手永佐野村ニ而武藤勝平江御配知田畑見図御帳
9, 11	八代郡野津手永御郡方格別御新地宝出下ケ名ニ而鹿子木畳平殿御知行地見図帳
12, 8, 6	財津喜内御加増知所附目録
天保 4, 8, 28	乃美順喜御知行所附目録
12, 7, 26	松野斎御知行所附目録
12, 7, 26	八木田勝助御知行所附目録
12, 8, 14	財津直人御知行所附目録
13, 6	合志郡竹迫手永高江村荒木権左衛門殿御知行高人数帳
弘化 2, 5	矢部手永下馬尾村御給地高人数帳
嘉永 3, 4	大村久兵衛病死ニ付御知行上目録
6, 12, 11	財津善之允御知行所附目録
7, 4	玉名郡内田手永稻佐村水津熊太郎殿御配知高人数帳
7, 4	水津熊太郎御知行所附目録
7, 5	下益城廻江手永平原村水津熊太郎殿御給地高人数御帳
文久元, 6, 24	柏木文右衛門御知行所附目録
元, 8, 7	吉田権左衛門加増目録
3, 5, 6	栗野左助御知行所附目録
明治 3, 5	飽田郡池田手永谷尾崎村斉藤嘉兵衛殿支配知高人数調帳

諸家文書による。

味不明の文言がある。この文言は吉村氏も取り上げている。くじ圖は籤であり、字体として籠と誤ることはないようであるが、あるいは籠は籤の誤りではあるまいか。もしそうであれば、くじ入れによる知行割は元和の知行割替まで溯ることになり、物成詰知行とくじは当初からセットであったことが予想されるからである。この解明のためには新たな関連文書の出現に期待するほかない。

細川領では地方知行宛行が幕末まで行われ、客観的に均等性・平等性を保証するかたちをとった土地・人畜の配知が続けられている。この地方知行の内容も検討されなければならない。

注

- (1) 寛永十年二月二十三日付忠利書状には「又知行割之儀ハ高と物成と庄屋ニかかせ候ヘハ、又小百姓申様と事之外違申候、又加藤平左衛門古帳之面を見候ヘハ是又かはくニちかい申候」とある(『細川家史料十一』四一頁)。
- (2) 同年正月三日付忠利書状にも「肥後蔵納之分は、はしく日比之物成之体も聞こえ申所も御座候へとも、給人之分ハ少も知れ不申候」「百姓ハ免をもらいかくし申候ゆえ、何を以物成之ならし可仕様無御座候」とある(『同書十一』一頁)。
- (3) 原口家文書、『菊鹿町史料編』四七二頁
- (4) 「御郡方文書」(永青文庫蔵)
- (5) 寛永十年七月二日忠利書状(『細川家史料十一』一一三頁)
- (6) 松井家文書
- (7) 「御郡方文書」
- (8) 「御郡方文書」
- (9) 吉村豊雄「撫高知行制の成立と知行形態」(『近世の知行制と給人財政に関する研究』)
- (10) 松本『熊本藩御書出集成』(未刊)所収の藩士諸家所持の御書出「宛行状」
- (11) 豊前での知行割は大きくまとまった地域を組に配分する方式であった。『綿考輯録』二卷四一三頁。吉村『前掲書』
- (12) 「熊本県史料近世編二」三七二〜三九〇
- (13) 知行所附目録が交付されるのは新知・加増・減知など知行高に変化が生じたときで、親跡相違なく遺産相続の場合は所附目録は出ない。
- (14) 熊本県立図書館蔵「熊本県検地諸帳」のうち山本郡村々の分

近世における知行割と圖取(松本)

近世における知行割と關取（松本）

- (15) 松本「寛永期細川領における「地撫」について」（熊本史学五〇号）
- (16) 前出御郡方文書「寛」③「クシをたて」というのはくじ取りのことと思われる。
- (17) 「寛帳」元禄五年九月十一日の条（永青文庫蔵 文3・1・1）
- (18) 「寛帳」享保十八年八月二十五日の条
- (19) 「寛帳」延享三年四月十七日の条（永青文庫蔵 文3・2・2）
- (20) 「寛帳」延享三年七月の条（同）
- (21) 「御配知一巻左之通」（「寛帳」寛延元年六月の条）
- (22) 熊本市島崎 蟹江家文書
- (23) 「寛帳」寛文九年十月十五日の条
- (24) 「寛帳」元禄三年二月十日の条
- (25) 荒尾市 原口家文書「上永野村人畜帳」（『菊鹿町史史料編』三〇四頁）
- (26) 寛永十二年六月の「山鹿郡御蔵納地撫一紙御帳」では千八百貳拾八石余であるが、寛永十四年の「山鹿郡上内田村地撫御帳」では千七百貳拾壹石余となっている。（熊本県立図書館蔵）
- (27) 前出 原口家文書「山鹿郡上内田村知行高畝数控」（『菊鹿町史史料編』四七三頁）
- (28) 「真源院様御代御侍免撫帳」（松本編『熊本藩侍帳集成』所収）
- (29) 前出 蟹江家文書
- (30) 「寛帳」文化八年三月朔日の項
- (31) 天明八年十月「御側御開地方割直シ畝数改帳」芦北郡芦北町 黒田家文書
- (32) 吉村豊雄「近世の知行制と給人財政に関する研究」二頁に「注目されるのは書出し文官である。……………」同人右為替地高貳百七拾八石七升七号物成詰ニシテ箒を入上毛郡清水町村ニ而遣之、役儀可為如先知也」（平野加右衛門）とあるように、志水伯耆・米田貞正の知行割替目録で「物成詰ニシテ」と記されている個所が「箒を入」「物成詰ニシテ箒を入」と記されている。「箒を入」とは替知に新地分を含めてという意味のようである。』とする。